

後遺症におびえ 差別と戦った

伝える 被爆者の「重荷」

3歳のとき、広島への原爆投下で被爆した千葉孝子さん(73)は、芦屋市での半生は、健康不安や差別との戦いだった。結婚をあきらめかけた青春時代、「ともに重荷を背負おう」という夫の言葉が生きる希望になったという。戦後70年という節目の夏、千葉さんは米国で自らの体験を語り、そして伝える。なお続く被爆者の悲しみと苦しみ。核兵器廃絶への強い思いを。(井上 駿)

当時3歳 芦屋の千葉さん



米国での講演に向け、資料を整理する千葉孝子さん
芦屋市精道町

宝塚の音楽家協力 米で講演や追悼行事

千葉さんは爆心地から2・5キロにあった自宅内で被爆し、生き埋めになった。「ピカッという光。市街地を焼き尽くす炎、街中をさまよう人たちの包帯ににじむ真っ赤な血。この三つが、3歳だった私の脳裏に焼き付いた」と振り返る。

幼いころは病弱で、芦屋に移った後も放射能の影響におびえた。夫との結婚の話が出たときも、千葉さんが被爆者であることで反対する声もあった。だが夫は「重荷をともに」と押し切ってくれた。

2006年に93歳で亡くなった母、副島まちさんは生前、兵庫県原爆被害者団体協議会理事長と



千葉さんに同行し、米国で平和コンサートを企画する池辺幸恵さん(神戸市中央区東川崎町1)

して、被爆者の救済に奔走する。

今回の渡米は、米国の平和団体「ヒロシマ・ナカサキ・ピース・コミッティ」と宝塚市のピア

二スト池辺幸恵さん(64) 自分を責めた。今なお後遺症に苦しむ仲間も多い。「ともに」と言ってくれた夫は8年前に亡くなり、戦後の時の経過を感ずる。

オバマ米大統領は「核なき世界」を訴えながら、核廃絶の動きは進まな

「米国では『戦争終結のために原爆投下は正しかった』と信じる人は多い。でも、被爆の実相を伝え、核兵器をなくしたい」

「米国では『戦争終結のために原爆投下は正しかった』と信じる人は多い。でも、被爆の実相を伝え、核兵器をなくしたい」